巻頭言

# 農に向かう心と希望の在り処

協同総合研究所専門研究員　小橋 暢之

## 田んぼしながら考える

里山に移り住み、集落の休耕田70アールを借りて米づくりをはじめて５作目を迎えた。今年は苗の植え込みを坪30株（慣行稲作では坪70株）という超疎植に挑戦している。

５月に田植えした苗は、太陽光を一杯に浴びてすくすく育っているが、困ったことに田の稲が疎であることはまた雑草にも好条件となり、一部の田でコナギという厄介な雑草がはびこってしまった。畦草刈りを終えて漸く田の除草を始めたのだが、コナギはすでに花を咲かせんばかりに成長し、畝間（うねかん）や株間にびっしりはりついている。畝間の雑草は、手押しの除草機を押して泥田の中に埋め込んで行く。株間はこれを手取りにするしかない。私は、梅雨明けの暑い日ざしを受けながら泥田の中を這いずり回り、一株一株、コナギをはがして行く。びっしり張り付いたコナギを取ってやると、稲は急にすっきりした姿になり、とても喜んでいる気がしてくる。

私たちが作る米は、私たち一家や親類、仲間たちの自給飯米用だから商品ではない。もちろん、再生産していくために代価はいただくが、利潤とは程遠くコスト計算すれば立派な赤字となる。と言っても、実は大半の農家の米づくりは赤字か赤字に近い。農水省の経営調査でも稲作農家１戸あたり（平均約１ヘクタール）の農業所得は39万円でしかない。トラクター１台買えば300万円以上もする。稲作収入の10倍近くだ。それでも高齢化した農家の多くは、楽で効率的な農業機械を買わざるをえない。こうして「農業はもうからない、自分一代でおしまいだ」と観念するのである。

若い者からすれば、泥田で稲の世話をするより、コンビニで時給800円のバイトをしたほうがはるかにいい。１日6,400円として100日働けば64万円の収入になる。農業は３Ｋ産業の代表選手だ、といわれ続けて来たうえにこんな低収益だから若者の多くが農業を見捨てた。そんな風潮が農村で常態化する中で、農業への関心が都会人のうちから高まってきたのは2000年以降、とりわけバブル経済が崩壊してからである。

定年退職を機に都会から田舎に移り、農

のある暮らしを選択する人々が増え始めた。私が東京から房総の里山に移り住んだのが2001年だった。都会人の農村回帰に注目していた雑誌、増刊『現代農業』の編集長、甲斐良治さんが『定年帰農　６万人の人生二毛作』を発刊し、農業関係の雑誌としてはめずらしい２万部以上の売れ行きをしめしたのが1998年であった。その頃、甲斐さんとあるときお茶を飲みながら、私は「ビジネスではなく、生き方としての農業が見直されなければならない」と熱っぽく語ったのを覚えている。

農の価値を経済的な尺度から計る限り農業への展望は見えてこない。換言すれば、現代のグローバルな資本主義と市場支配のくびきのもとでは、常に競争と効率化を強制され小農が小農らしく存続することは至難のわざに近いということだ。小農の原理は、暮らしと仕事(農)の未分離だとすればもう一度この原理に立ち返り、暮らしとしての農という地平から、農業を見つめなおすところから新しい出発点が見えてくるにちがいないと私は思っていた。

## 生き方としての農業

「日本ではいま、稼ぎの手段ではなく、生き方のベースとして農業を選ぶ若者＝『青年帰農者』という新しい兼業農家が誕生している。『後継者不足だから』と言う視点ではなく、その底流にあるものを見きわめ生かしたい」甲斐良治さんは、2002年に編集発行した『青年帰農　若者達の新しい生きかた』の編集後記でこう書いている。この号では、茨城県八郷町に帰農した青年たちのいきいきした活動や塩見直紀さんの「農をベースに天の仕事を」などの論考、いわゆる半農半Ｘ論がお目見えしている。

そして2005年、甲斐さんは、衝撃的な『若者はなぜ農山村にむかうのか　戦後60年の再出発』を編集発行したのである。ここでは、農村研究家として最近活発に仕事をしている結城登美雄さんの「人は再び、農山村に生きる」という力の入った論考を筆頭に、今ではかなり著名になった新潟県上越市のNPOかみえちご山里ファン倶楽部の取り組みが紹介されている。また故人となった、鴨川自然王国の藤本敏雄の論文「希望宣言」(1992年)が再収録されている。この論文で藤本敏雄は産業としての農業は袋小路に入ったと指摘しつつ、このような論理を超えていくために次のように言及している。「では、どういう立場に立てば反論できるのか、それは、『生活としての農業』という立場に立つことです。生活としての農業という立場に立てば、農業の現場はさらに医療の現場としての形が具体的にできる。農業の現場は実は健康空間になるのです。同時に、農業の現場は子供達の生命教育空間にもなる。農業は医療になり、教育になるという、そこですべてがイコールで結ばれてくる。これが新しい地平です」。

甲斐さんがこの雑誌の編集で藤本敏雄の論考をあえて再録したのは生き方としての農業に「新しい地平」を確信したからに違いない。彼はこの雑誌の編集後記で次のように語っている。

「農山村、特に山村に向かう若者が増え

ていることに気づきはじめたのは今年になってからだった。年齢を聞けば32歳前後。これをひそかに32歳ラインなどと称し、若者たちの後を追いかけてみた。すると当初想像した以上の数の若者が想像以上の『仕事』を農山村に作り出していた。その仕事とは、戦後60年ふるさとを守り抜いた祖父母世代の知恵や技を、その消滅のスピードと競い合うかのように受け継ぎ、都市生活や次世代の子供達に引き継いでいくこと。まるで農山村の文化総体の継承を仕事としていたのである。…若者たちは状況への批判にエネルギーを割くのではなく、問題は『自分たちが何をしてどんなふうに生きていきたいのか』だと農山村に向かった。…そして、かみえちご山里ファン倶楽部のように『自給に根ざした自治』の時代を拓こうとしている。しばらくは農山村に向かう若者達に付いて行く編集者でいたい」。

## 若者を阻む農業の壁

里山でささやかな米づくりをしている私のところへも、定年退職したら田舎暮らしをしたいといった中高年に混じって、「農業をやりたい」と言う若い人も時々やってくるようになった。漠然と農業に憧れているのかなと思っていたら、「不耕起で稲作をしたいんです。奈良で実習してきました。この辺で田んぼを借りたいんですが」(女性)、「里山で山羊を飼いたい」(男性)と、かなり明確な言い方をするのでびっくりした。

山羊を飼いたいと言っていた20代の青年はNPOの仕事をメインとしながら近くですでに15頭の山羊を飼いはじめた。農業で働きたいと言っていたある若い女性は、家賃２万円の住まいを見つけ移り住んで、さっさと水耕栽培をしている農業法人にアルバイトで就農した。彼らの思いは意外に深いことに気がつかされた。そうした若者たちの未来に希望を感じながらも、私の脳裏にはいくつかの懸念が去来してやまない。若者がその人生を賭して農業をやりたいとしてもなおそれを阻む障壁が横たわっていて、この障壁を越えるには相当な覚悟がいるのではないかと思うからだ。

障壁の一つは、農産物生産の低収益性である。先に米づくりの所得水準について書いたが、比較的所得が大きく専業農家がいる野菜作においても、農業経営調査によれば農業所得は174万円でしかない。だから、甲斐良治さんが「青年帰農という新しい兼業農家」と表現したように農業を基盤とした生活を持続的に維持するためには、積極的な農業外での稼ぎが必要になるのである。専業農家という幻想を捨てたほうがいいのだ。もともと小農は、自給をベースにしつつ藁加工などの農家副業で稼ぎ、これが全所得の３割を占めていた。また、農外の賃労働などの手間稼ぎは家計維持のため必要だった。こうした柔軟な発想に立つことができれば、障壁の一つは案外楽に越えられる。

二つ目の障壁は、生産物の販路確保の問題である。有機農業(それはいまだ全生産量の１％程度にすぎない)をめざす若者たちが立ち尽くすのもこの商品流通の壁だった。近年、農産物直売所が興隆しつつあり、多品種少量型生産の小さな農家でもここで販

路を得ることが可能となった。さらに、有機農業者の中には、自らの生産物を買い支えてくれる消費者仲間のネットワークを構築し、安定的に営農に取り組む人々も出てきた。つまり、消費者を農場生産の利用者、活用者として位置づけ協同していく方向である。私はここに、つまり市場原理を超えた、いわば縁約(注1)とも言うべき原理にこそ新たな農の活路があると考えている。

三つ目は制度と習俗の壁である。若者が農業に取り組みたいと言っても、農地を確保するのは農地法の壁があって、賃貸にしろ所有にしろ、非常に厄介だった。賃貸については今回の農地法改正により今までの制限が解除され、個人はもちろん企業もNPOなども農業委員会の承認があれば賃貸自由になった。しかし、農地を借りようと思えば地主である農家と交渉しなければならない。そのとき、若者が例えば「農薬も化学肥料も使わないで畑も耕作しない不耕起の自然農法でやりたいから農地を貸して」と言ったら、「農薬も化学肥料も使わないで農業ができるか、不耕起なんてふざけるな」といって一笑に付されてしまうのがオチであろう。これが習俗の壁である。こうしたいくつかの壁を乗り越えていこうとする強い覚悟なしには、生き方としての農業選択も挫折することになるだろう。

## ある若者たちの実践

生き方としての農業を選択した農業者たち、彼らは農業障壁をどう越えていくのだろうか。どんな覚悟をしているのだろうか。これについては感動的な「農業宣言」がある。

結城登美雄さんが「帰農の風景2006年春」(『定年帰農2006年』現代農業増刊号)のなかで、北海道上川町で農業法人を立ち上げた3人の若者のメッセージを紹介しているのだが、このメッセージの中に現代若者たちの類まれな深い覚悟と透明な希望を感じるので引用してみよう。この若者たちは、京都の大学を同窓とする20代から30代初めの青年たちで、大学のキャンパスにある農園で知り合い、卒業後それぞれ5年間の農業研修を終えて上川町で2ヘクタールの農地を得て「かむつみ」(注2)という農業生産法人を立ち上げ、農業を始めるに至った。

「私たちの目的は『本当の豊かさ』を取り戻すことです。また、そのために必要な知識と技術を集積し、自分達だけでなく誰もがそれを活用できるシステムを作り出すことです。では、本当の豊かさとは何でしょうか。私たちはそれを『自然と調和した、シンプルな生活』と考えます。上川町の風土の恵みを生かし切る、手づくりの喜びに満ちた、簡素で質素な生活です。それを実現するために、農薬と化学肥料を使わない、有機農法・自然農法による農業生産を私達は職業として選びました。(中略)『かむつみ』は、営利を第一の目的にしていません。そのため、私たち3人の所得は収益の7割とし、残りの3割を『かむつみ基金』として積み立てます。基金のうち、2割を法人活動を充実させるための費用にあて、残りの1割は支援者とも協議の上で、私たちの利益ではなく地域全体のために使います。(中略)私たちがめざすのは簡素で質素な生

活であるため、過剰な金銭収入を望んでいません。そこでここの所得上限を360万円とし、それを超える分については全額、基金のほうへ回すこととします。(中略)私たちはこの町に、次の時代を幸せに生きるための小さなモデルをつくりたい。農業はそれを実現するための中心的なツールです。私たちは種を蒔きます。その小さな種が、いつか大輪の花を咲かせ、やがて百の実を結ぶことを祈って」。

## 新たなコミュニティ農業の可能性

この若者たちの気概に、私は新しい農業の希望と道筋を垣間見ることができそうな気がする。簡素で質素な自然と共生する暮らし、農業する働く仲間との協同、農場を支えてくれる支援者・消費者との協同、そして地域社会との協同と貢献、まさに3つの協同の実行であり、不分割積立金の実践にほかならないではないか。このような農業をなんと呼べばいいのか。とりあえず、私はこれを「新たなコミュニティ農業」と呼んでおきたい。

彼らが自ら決めた所得の上限(それは慎ましやかな目標だが)に到達する日までは、まだ険しい試練がたくさんあるだろうと思う。しかし、彼らはくじけないだろうと感じる。なぜなら希望があるからだ。先に紹介したか、みえちご山里ファン倶楽部の若者達もNPO発足以来8年目を迎えてなおメンバーの収入は年収180万円だという。「自信をもって言えるのは、スタッフはずっと貧乏だったということだ。彼らに『貧乏だったか?』と問えば『いやあ、そうでもありません』と答えるのだが、それは精神的に貧しくないとか、むら人にいろいろ食い物をもらえるのであまり金が要らないという意味で言っているのであって、社会一般と相対的に比べたら、間違いなく貧乏である」と、法人の専務をしている関口さんは語っている。今、彼らは新たに出資して「かみえちご地域資源機構株式会社」というのを立ち上げ、スタッフ給与の「蛸足化」を図るという。「自分で失敗してよく、成功してもよい山里NPOのスタッフたち。報われる可能性のあるものは貧乏であっても悲惨ではない。要は『希望』の有無とその質だけだ」(『現代農業2009年8月増刊号より』)。

さて、我々ワーカーズコープも運動として農業に取り組むときが来た。私たちは農業にいかなるスタンスで臨めばよいのか、農業に参入することで何を実現していくべきか。おそらく、我々が基調としてめざすべきは、瑞穂の国の小農たちがつくってきた自然や作物・家畜などの農的生命との共生、持続的で循環性のある農の回復ということ、またグローバル化する市場と資本に従属しない自立した農の回復、さらに作る人と食べる人との協同に基づく食べ物の自給回復という三つの取り戻しではないだろうか。こうした回復・再生につながる農的労働の尊厳と誇りの回復こそ最も重要なのではないか。そんなことを私は田んぼしながら考え続けている。

疎植した稲が逞しく伸びて穂が出始めた。種を蒔き続けよう、いつか必ず芽が出て実がなるから。

注1)縁約:社会学者シューの造語。人の縁キンシップと契約コントラクト。縁に基づく契約キントラクト=縁約

注2)カムツミ:アイヌ語。カムイ=神。神の果実、「桃」の意(日本の古代でも桃は神聖な果物)。